

モード Mode Mode は語る

中野 香織

ファッション産業の暗部に切り込む映画「グリード ファストファッション帝国の真実」が18日より公開される。モデルは、ファストファッション全盛期の帝王として君臨しながらも転落した英国のフィリップ・グリーン夫妻。マイケル・ウィンターボトム監督は脚本から手掛けており、虚構という体裁をとりながら、ゆがんだグローバル資本主義の闇の構造や、セレブカルチャーの空虚さ、世界の格差を暴き出す。

現実世界を振り返ると、ファストファッション全盛期は2000年代。フィリップ・グリーンは「トップショ

ファッション産業の闇

劣悪な製造環境、強く反省



作品の一場面©2019 COLUMBIA PICTURES INDUSTRIES, INC. AND CHANNEL FOUR TELEVISION CORPORATION

ップ」をはじめとするアルカディアグループを率い、ファッションの民主化をもたらした王としてふるまった。トニー・ブレア首相時代の06年

にはナイト爵位まで授与された。

しかし「早い、安い」というメリットは、南アジアで低賃金をさらに下げられて働く労働者の犠牲の上に成り立っていた。利益はすべて先進国の資本家が吸い上げる。世界がこの構造に気づくことになった事件こそ、13年に起きたバングラデシュのラナ・プラザ縫製工場の崩壊事故だ。「服は、金の卵を産むガチョウ」というセリフが映画で出てくるが、資本家がガチョウを環境劣悪な場所で無理やり作り出していたのだ。

以後、ファッションビジネスにも倫理や環境配慮を求める動きが活発

になる。15年には「ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償」というドキュメンタリーが公開され、ファッション産業にこそ持続可能性が不可欠という考え方が主流になっていく。グリーンには税金逃れ、セクハラなどのスキャンダルが続き、16年に爵位をはく奪され、新型コロナ禍の20年にアルカディアグループは破産申請した。

いま、強制労働の可能性のある産地の綿に対して世界中が拒否反応を示しているが、理由のひとつに、服を着るときに罪悪感を覚えたくないという消費者の素朴な欲望もあるだろう。ファストファッションの反省を経た今、「着心地よさ」の要素には、原料生産者の尊厳まで含まれるようになっている。（服飾史家）